新ふるさと総研の“Standard（あたりまえ）”

- 全員が、「立場」ではなく、「知識と経験」を持ち寄る
- いつでも前を向いて、楽しく好きなように「まちの理想」を考える
- 「同じ方向を向いている」ことを信じ、それぞれの違いを楽しむ
- お互いの思い・考え・活動に関心を持ち、もっと知りたいと伝える
- 自分がしたい／できることを自分がしたい／できる形で提供する

研究員が発表した「新しいふるさとの姿」の一例

研究員が描いた新しいふるさとの姿

「いつでも帰ってこれるまち」
町に住んでいる人も、町を離れている人も、そして町をふるさとと思ってくれている人も

「きなっせ　よんなっせ　益城町」
宿と観光と交流の融合
災害時には九州のボランティアベースになれるポテンシャル

「応援し合えるまち」
誰かのチャレンジを、誰でも応援できる
応援されることで、また新しいチャレンジが生まれる

など

14人の研究員の「新しいふるさとの姿」それら「全てを〝ツナグ〟ことば」…

「まち」はみんなのお父さん、お母さん
だから、
いつでも帰っておいで
「おかえり。」
「ただいま。」
寄り道したくなるまち
益城町

平成31年3月16日

「新ふるさと」に向かって

1+14の「新しいふるさとの姿」の“言葉”を町に贈りました。これまで／これからの「研究」の素材も。
そして、これからの「新ふるさと」をどう作るか、町長・副町長とともに語り合いました。

新しいふるさとの姿を実現する具体策

何を植えるかわからない、「地域で育てる」学校菜園

何ができるのか伏せた状態で、学校菜園で育成開始。
その地域になじみ深いものを植えることで、地域と子どもたちの交流も生み出す。

自分が住む地域のステキな大人を知る

多様な世代の人々が交流できる機会（子ども会での親子役員や地域探検）の創出や
夏休み中の高校生の町内企業・役場へのインターンの実施

接続可能な、元気な農業

農業体験と民泊をはじめとした、新しい農業の担い手の発掘と、地域のおばあちゃんも社長になれる農業経営力の向上

『公園』ユーチューバー

公園で何がしたいのかを子どもたちと大人が一緒に考え、遊具や遊び場を協力しながら作っていく。その過程を子どもユーチューバーが動画で発信

新ふるさと総研の研究はつづく…